

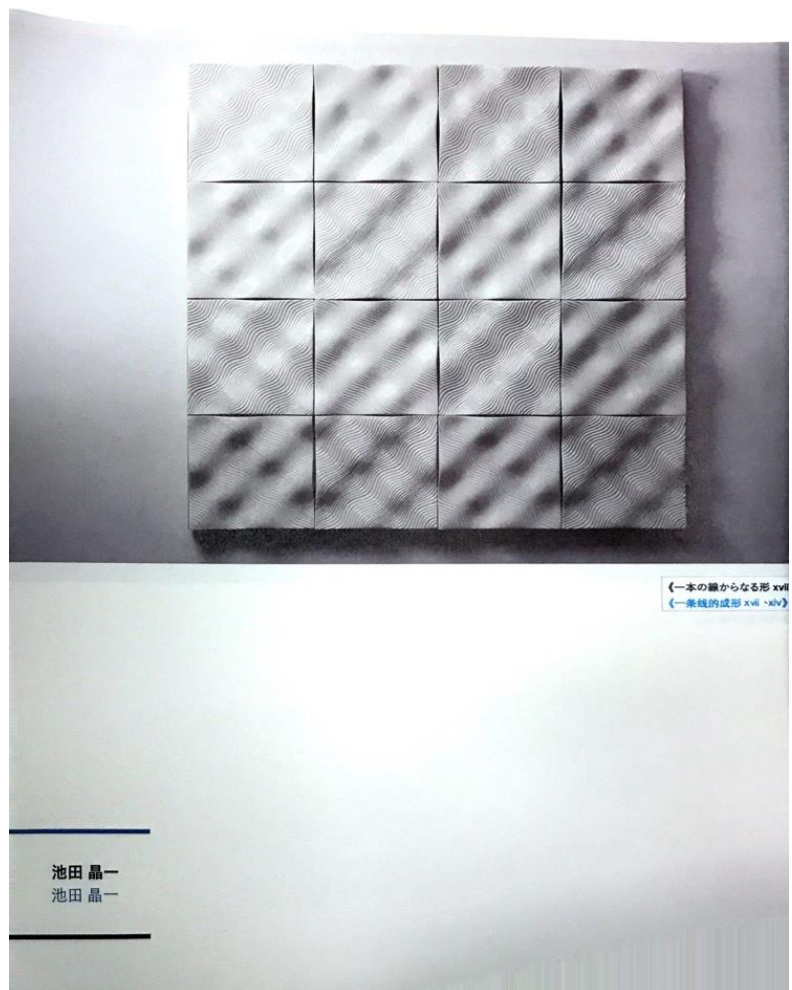
Exhibition pictorial record

Exhibition catalog

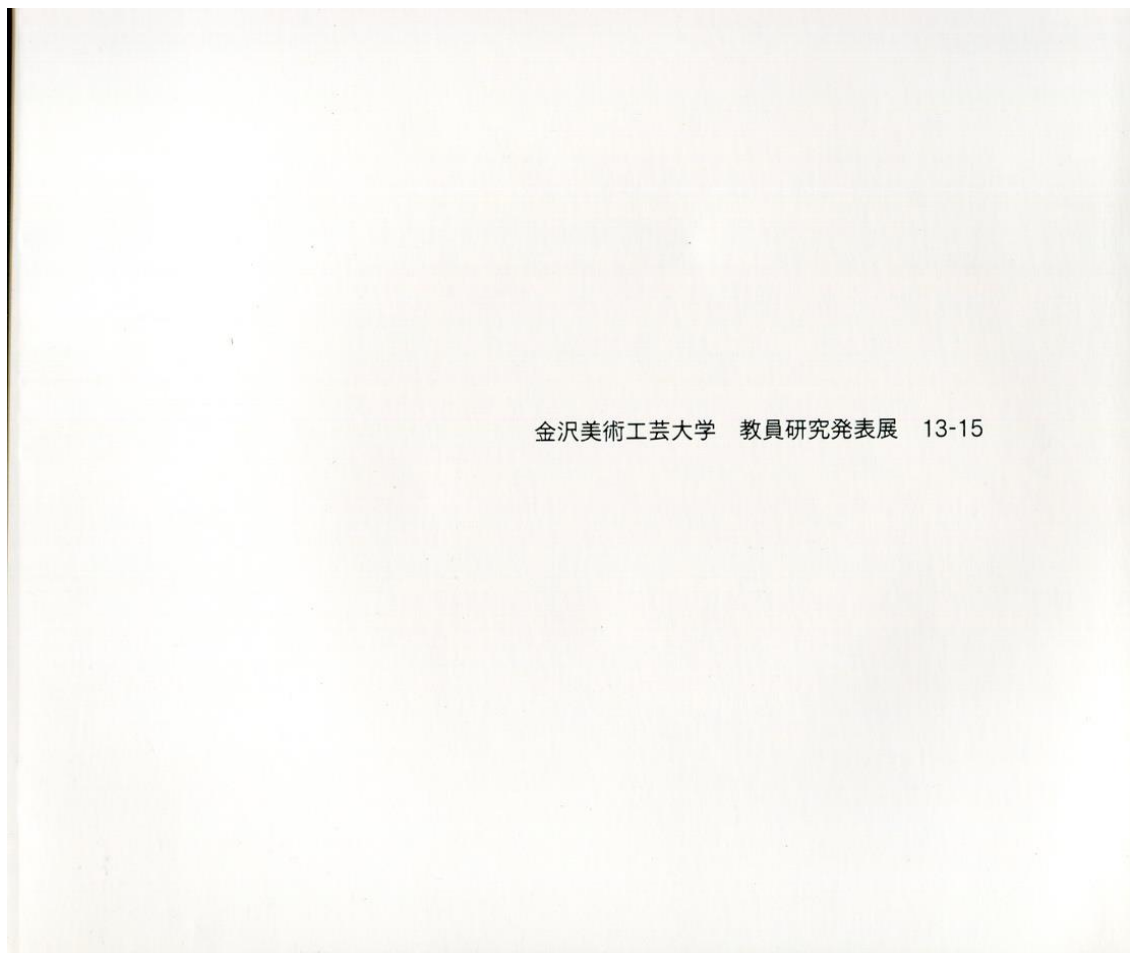
© Solo Exhibitions © Group Exhibitions catalogs

Nov.2017 Dalian Institute of Technology ·
Kanazawa College of Art Exchange
Exchanges

21st Century Museum of Contemporary Art,
Kanazawa
Citizen Gallery A·B (Kanazawa city, Japan)
Planning at Kanazawa College of Art



Nov.2015	Kanazawa College of Art Exhibition of faculty's research presentation 2015 - Work of the College -	21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Citizen Gallery B (Kanazawa city, Japan) Planning at Kanazawa College of Art
Nov.2014	Kanazawa College of Art Exhibition of faculty's research presentation 2014 - Work of the College -	21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Citizen Gallery B (Kanazawa city, Japan) Planning at Kanazawa College of Art





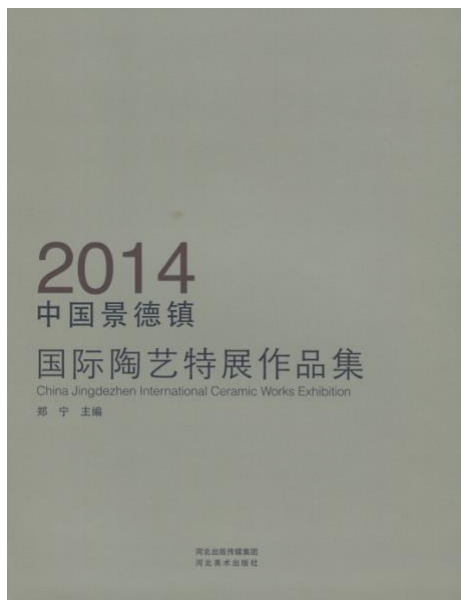
①「印象」光と翳 金沢駅西広場シティーゲートモニュメント 磁器(ニューボーン)ほか、パネル ②ガーデンファニチュア「光と風の集う場所」 磁器、パネル



「陶磁におけるIT技術(3Dプリンター)を活用した工芸的表現の研究 ～フリーカップの制作～」 磁器、パネル

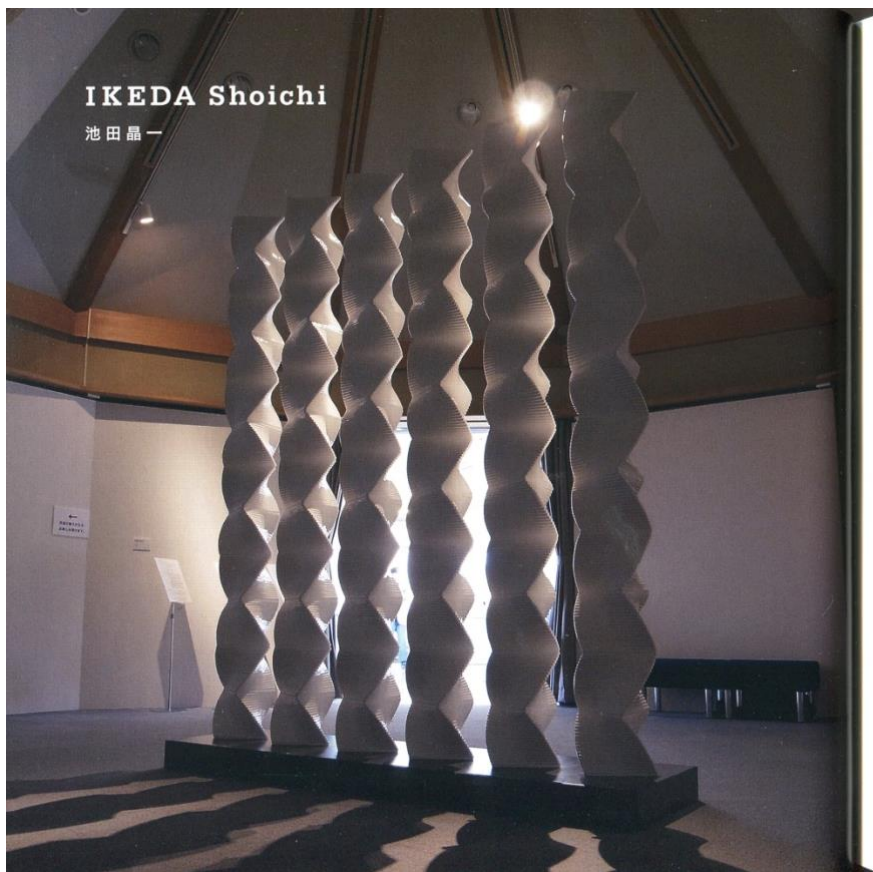
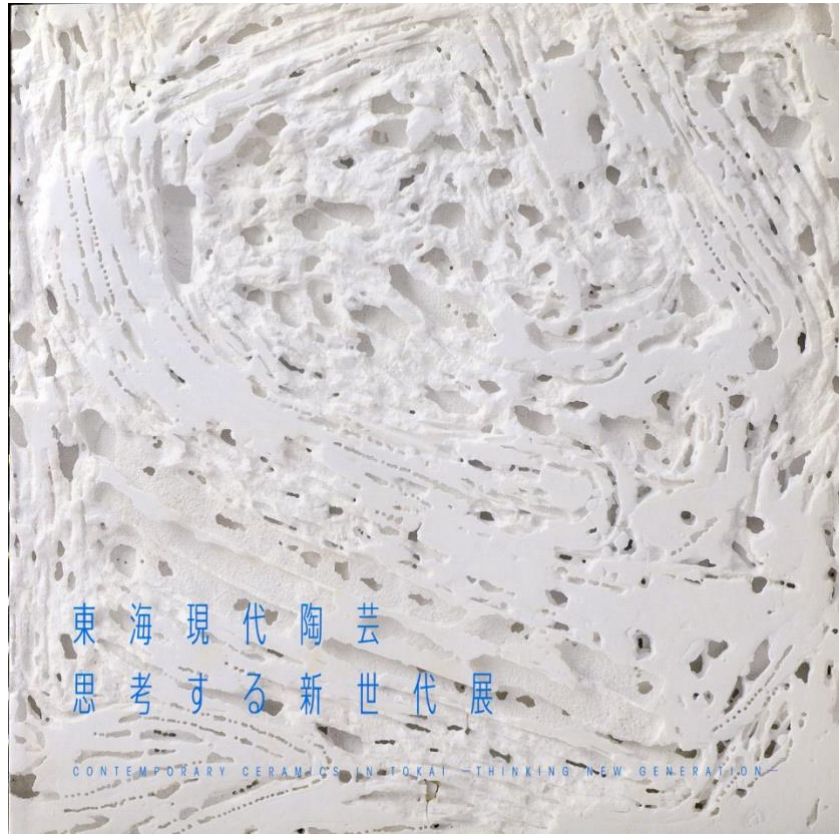
Oct.2014 China Jingdezhen
International Ceramics
Expo International
Ceramics Special Exhibition
Artist special invitation

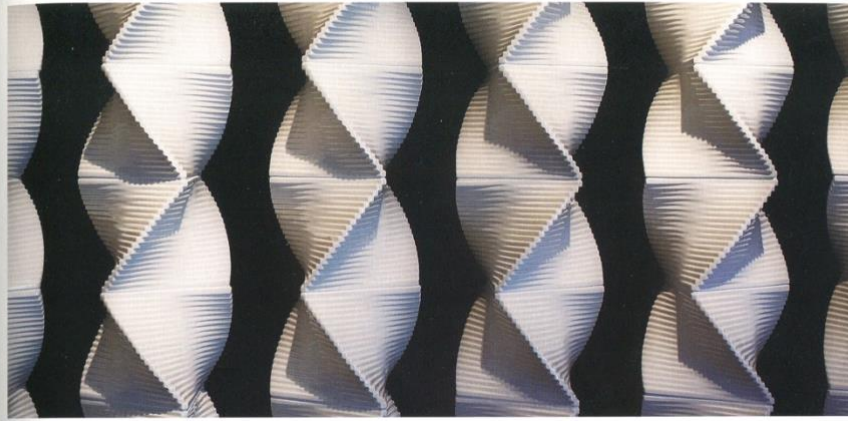
Jingdezhen city government China



Aug.2011 Contemporary Ceramics in
Tokai -Thinking Now
Generation

Aichi Prefecture Ceramic Material Museum
(Aichi Japan)





1-1

天使の梯子

Ladder of the angel

211.0×61.0×255.5cm

2010

滋賀県立陶芸の森所蔵
 <アーティスト・イン・レジデンスにて制作>

「光と影がつくる印象」

私達の世界は「光」で覆われている。
 光は様々なモノの表面に「陰翳」を創り、その光を私達の目が捉える。
 私の作品の表面は、細かな波模様凹凸によって構成される。
 作品上に現れる光は、細かな「光と影」に分解され、
 作品は光や空気と共にあるような柔らかな存在感を示す。
 時として、細かく分解された「光と影」は作品の物質感を喪失させ、
 像としての「印象」を創り出す。
 私は、私の手掛ける作品は絶対的な造形物としてではなく、
 見る人や周辺にある様々なモノと関係を持ち、「相対的」に意味を生じ、
 「印象」を創り出すモノでありたいと願うのだ。
 作品は見る者に「意味」を与える。
 器であることは、使う事の意味である。
 大きな塊が、見る者に対して座る事を与えればそこに意味が生じる。
 柱状の作品達が、間を仕切るフェンスの様な役割を担う事も、
 空間に対する意味である。
 作品が、あなたと心地よい関係を保ち、あなたと共にある事を願う。

19



1-2

光と風が作る形

Shape of light and wind

66.0×76.0×50.0cm

2010

滋賀県立陶芸の森所蔵
 <アーティスト・イン・レジデンスにて制作>



20



1-3
—
波の中に見える陰翳の気配
Impression of light
and shadow in a wave
434.0×82.5×7.5cm
2008



1-4
—
"WAVE", flower vase
20.3×5.8×23.3cm
2010
—
Wave cup, "L"
8.3×7.5×20.0cm
2010
—
Wave cup, "M"
8.3×7.5×10.8cm
2010
—
Wave cup, "S"
8.3×7.5×6.4cm
2010

21

Add a translation to the next page

れてしまったように感じる「何か」をそこに再発見するからでもある。そしてやきものを作るということ、あるいは見る、使うということは、こうしたやきものが培ってきた世界観を自らに内在化させ、現代に生きる自身を検証していくための指針の一つとして機能するものではないだろうか。その意味で、やきものによる表現とは、表面的な現代的な主題、モチーフの新奇さに回収されるものではなく、現代という時代とやきもの歴史性を作り手がどのように受け入れ、寄り添い、また変革したのかという経験の結晶だといえる。つまり、現在のやきものの価値を再考する上では、先に触れた現代社会における変化のあり方と人間存在そのものを捉える複眼的視点が必要になるのである。

こうしてみると、やきものを取り巻く状況が大きく変化している現在、歴史的に日本のやきものを牽引してきた東海地方において、あらためてやきものという存在の価値と可能性を考えることは重要な問題だといえる。

本展は、新世代の陶芸家15名の視点と思考を通じて、多様なやきものによる表現とその今日における可能性を考えるものである。なお、本展は、2008年に当館で開催した「新進陶芸家による東海現代陶芸の今」展の続編である。そのために作家の選考にあたっては、前回同様に、現代のやきものに関する状況を鑑みたくえて、東海地方のやきもの表現の現状を多角的に描き出し、問題提起の場となるように試みた。それは例えば、陶磁器デザイナーや実用品を制作する作家を選ずること、「実用」や「技術」的側面から伝統陶芸に対する一般的な認識を揺さぶり、さらに立体造形を制作する作家を通じて、美術と工芸、彫刻と陶芸などのジャンルに対する意識の再考を迫るということなどである。このような構成によって本展が、一般的に流通している芸術としてのやきものや陶芸家による「表現」の正統的物語を解体し、少し広い視野から「陶芸」に関す

る言説・イメージの再考を図る場となるのではないかと考えた。最後になるが、本展の出品作家を簡単に紹介しておきたい。

池田晶一（愛知県：1966年生まれ）

—
池田はおそらく今回の出品作家の中で最も一般的な陶芸家像から遠い作家ではないだろうか。それは池田の制作行為が素材と自己との関係に限定されることなく、制作が事前のプランニングや綿密なシミュレーションから始まることに象徴的である。しかし池田はやきものに限らず芸術一般を道具的連関から捉え、環境芸術として存在させることで作品に機能と意味を見出している。その意味で池田作品に見られる光と影の関係や波状の表面、螺旋形態などは、それ自体を形態における装飾効果として完結させることが目的化されていない。池田の意識とは、場と環境に開かれた存在へと作品を位置づけることにある。つまり池田の作品は、複数の作品同士の関係性に人が交わることで、場を再認識させる装置として機能し、同時に環境の一部としてそこに佇んでいる存在でもありうるということである。こうした池田の思考は、社会と関わり、人間の生活の地平で展開してきたやきものあり方を現代に呼び起こすものであるように思われる。

伊藤秀人（岐阜県：1971年生まれ）

—
伊藤は一時期陶器作品を手掛けたが、主に磁器を中心に作陶活動を展開する作家である。伊藤が得意とする技法の一つに磁器の練り込みがある。練り込みは数種の土や顔料を練り込むことで、装飾と色彩が一体となり、釉薬や線刻、絵付けなどとは異なる装飾効果

“Contemporary Ceramics in Tokai -Thinking Now Generation”

Shoichi Ikeda (Aichi Prefecture, born in 1966) Ikeda is probably one of the most distant artists from the general potter's frame.

Ikeda's production activities begin with preplanning, careful simulation, and the relationship between materials and self.

However, Ikeda is not limited to new works, but incorporates general art as a tool for works as an environmental art to know the function and meaning of works.

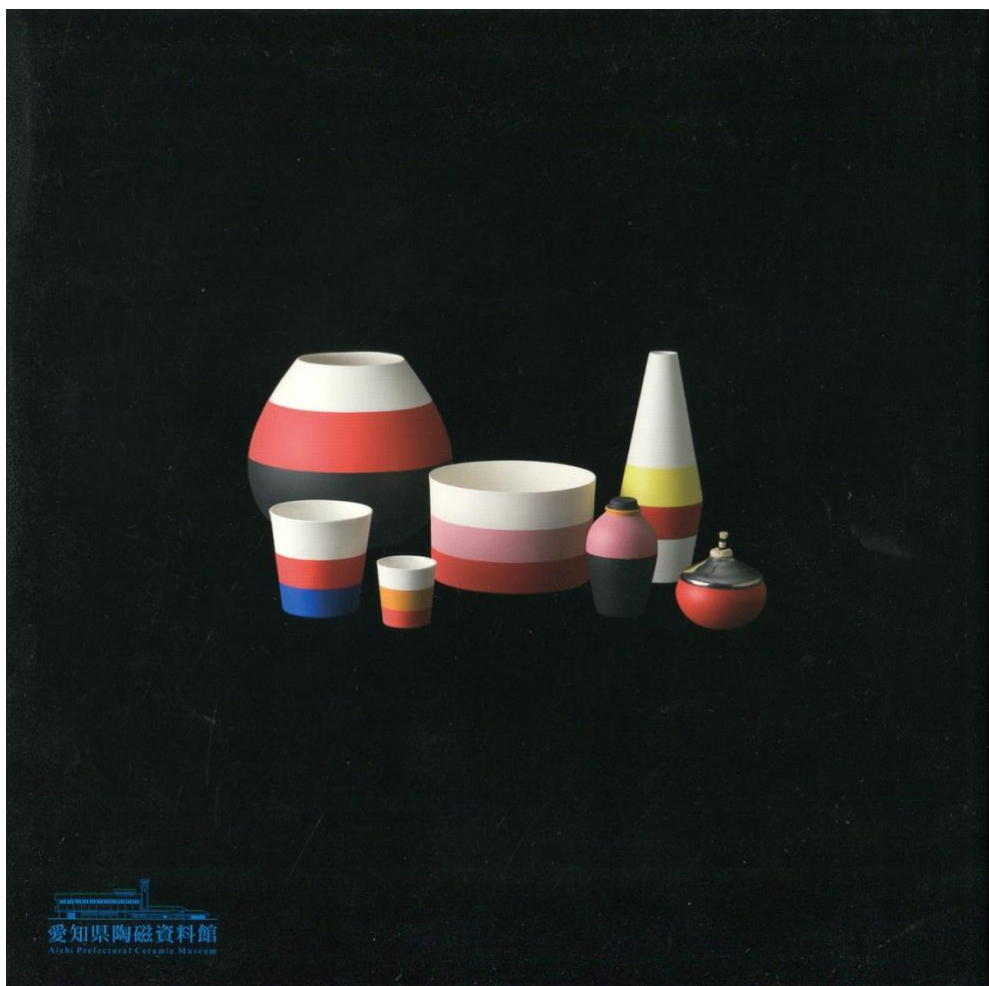
In that sense, the relationship between light and shadow, the wavy surface, the spiral form, etc. found in Ikeda's work is not intended to complete itself as a decorative effect in the form.

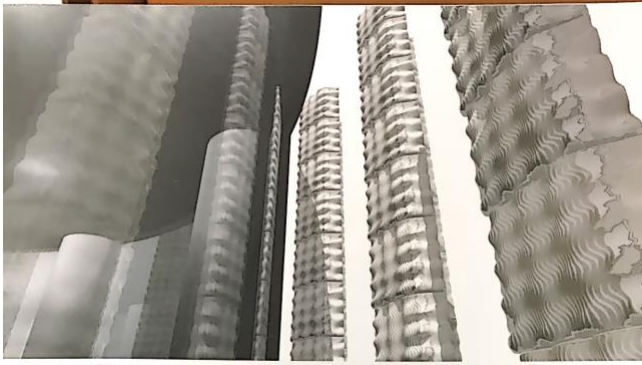
Ikeda's consciousness is to position the work to the existence that is open to the place and the environment.

In other words, Ikeda's works are interrelated to the relationship between multiple works, which means that they can function as a device to make the place re-recognizable, and at the same time, they can also exist as part of the environment.

These thoughts of Ikeda seem to be related to society, and to evoke the way of modernization developed in the horizon of human life to the present day.

Written by Tomohiro Daicyo (Aichi Prefectural Ceramic Museum <now National Museum of Modern Art, Kyoto>)



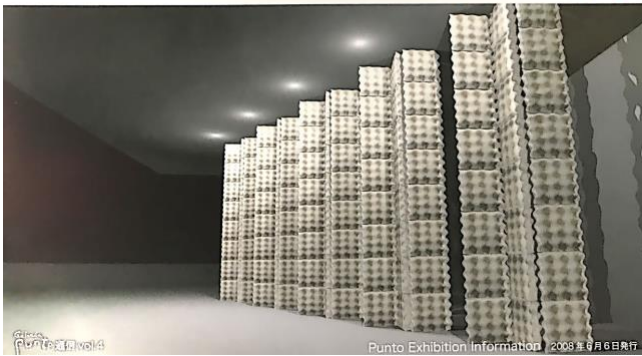


変容する空間、

陶造形が空間にもたらす新たな可能性。

池田晶一展

2008年6月18日(水)~6月29日(日)
23日(月),24日(火)休館
11:00~19:00.(最終日~17:00)

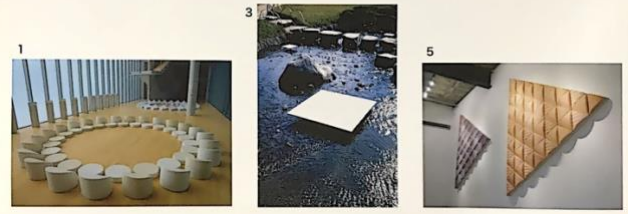


Punto Exhibition Information 2008年6月6日発行

池田晶一の新たな空間

金沢美術工芸大学学長 造形家 久世建二
20年も前のことであるが、池田氏の金沢美術大陶磁コース
在学中の作品を私は鮮明に記憶している。焼き物のコースを
選択して、何をやるのか、なぜ作るのか大いに悩んでいた頃
の作品である。それは鮮やかな群青色のマットな乾いた質感
の3角形や4角形の磁状のボディに、これまたカラフルな針
金状のものや小さな球体や立方体がケーキのトッピングのよ
うにくっ付いていた。情念的でポップな陶芸作品であった。
しかし、大学院修士課程進学の後、石膏型を使って反復成形
する技を身に付けたその時からガラリと作風が変わった。幾
何学的形態の無数の組み合わせに熱中し始めたのである。

彼は元来造形のアイデアの展開を図るとき、余分な形状や無
理な形や無駄な作業は出来るだけ排除してシンプルで美しい
形にすることが得意であった。空間に無限に増殖する形はD
NAの螺旋を想起させて幾つものコンパネでかなりの貴金を稼
いだはずだ。大学院修士課程を修了後岡山県立大学の助手に
採用されてパソコンと出会ったことは、その後のアイデアの
拡大に加速度をつけた。最近の彼は金沢美術大博士後期課程に
籍を置き制作と論文作成に四苦八苦だが「与えられた空間を
作品が埋めるのではなく、作品が新たな空間を作る」とパ
ソコンを駆使しながらも原型や型作りは手作業でじっくり作
りこんでいる。プリントでの展示に彼のような未来がシミュ
レーションされるのか楽しみにしている。



変容する空間、陶造形が空



1 2 成羽町美術館「SUN&MOON」1998年
安藤忠雄設計の成羽町美術館において、太陽と月、それら
をとりまく12星座をセラミックとガラスでインスタレー
ションし、大規模な個展を展開した。
3 4 おかやま後楽園300年祭 空間アート「ガーデン」
出品 2000年
「現代美術を通してみる後楽園」の題旨のもと11人の招待
展出品作家の1人として「雲の鏡」「空の鏡」と題する陶板
を出品した。
5 6 Galeria Punto, ギャラリーAO「心の眼に映る色
セラミックによる色彩の妙一展」2006年
壁から床、コーナーへ展開。会場の制約により展示方法を変
え作品が別の作品の様に変化することを経験。作品が空間に
与える意味づけを、新たに深く考え始めた頃。

空間をイメージして作品と向き合う

陶造形家 池田晶一
私が手がけた陶造形とは、単に立体物のフォルムであるう
か? いやそうではない。私はいつも作品の置かれる空間を意
識している。作品を取り囲む空間には、光と陰影があり、色
彩がある。空気があり、風がある。また、温度があり、湿度
があり、匂いもある。空間には、人があって初めてその空間
にながしかの意味を生じる。その場所に立つ人の目には、
作品はどのように映るのか? 作品は場の印象を構成する重要
な要素なのだ。私は作品を通して、その印象を創りたいと考
えている。空間の中で、私の作品には光と陰影は重要な要素
である。作品の表面にある波状の形は作品のフォルムを決定
付けるとともに、僅かな光の変化を取り込み微妙な表情を映
し出す。また、陶磁器は土を素材としており、奥行きと深み
のある素材特有の趣を表してくる。作品のフォルムが作り出
す空間の構成、場の印象、素材感のある表情、これらが相ま
って私の意図するものは方向付けられる。
現代社会に生活する私たちにとって、これらの風合いを感じ
る力は衰えてはいないだろうか。私はとも日本人が持ち
得ていた感受性を醸成させ、それを作品に表したいと思っ
ている。何よりもそれは、私自身にとって心地の良いことだ
から。光と陰影、空気の流れや気配は刻々と変化する。
私の作品と出会った時に、作品を取り巻く場の印象と変化を
感じ取ってもらえれば幸いである。

間にもたらす新たな可能性。

7 8 ちまこ ちまこ ちまこ展 2007年
金沢市内の町屋の特性をテーマにしたグループ展。前年
に経験したコーナーへの作品設置などを展開、空間そのもの
を作品にするという考え方が明確になってきている。
「個」としての作品から「場」としての作品へ。
9 10 サ・ベニシユラ東京 2007年
世界に展開する高級ホテル、ザ・ベニシユラ東京のスイー
トルーム、4階フロアのインテリアに採用される。建物との
調和の良さと選ばれ、来訪者の評価は高い。
11 12 表紙 CG 金沢美術工芸大学 博士後期課程研究
発表会作品 2008年
現在は「場」というものが重要な視点になっている。作品の
スケールも非常に大きなものが考えられ、創造するイメージ
をコンピュータ・グラフィックスで表現し始めた。

Puntoでの展示に使用するタイル。これまでの半磁器土
から初めて磁器土に挑戦。(写真は焼成途中のもの)

展示イメージ (CGで作成)

【プロフィール】
1966 京都に生まれる
現在 日本福祉大学 健康情報学部 福祉工学科 准教授
金沢美術工芸大学 大学院 美術工芸研究科 博士後期課程在籍
2000 「焼き物新感覚」シリーズ8 陶の時間 池田晶一展
INAX企画 (世界のタイル博物館・愛知県常滑市)
2001 工芸からのアプローチ・現代造形7人展 (松屋本店・愛知県)
<以降03,05>
2002 個展 (Galeria Punto・岡山市) <以降04,06>
2006 個展 (ギャラリーAO・神戸市)
2007 ちまこ ちまこ ちまこ展 (金沢市内町家)
金沢美術工芸大学大学院陶磁コース10人展
(ギャラリーマドニエ・京都府)
個展 (なびす画廊・東京都)

http://homepage.mac.com/mooming/shoichi_ikeda/web-content/
【アーティスト・トーク】
日時: 6月21日(土) 17:00~
会場: Galeria Punto (岡山市表町1-4-61 2F)
作家在廊予定日: 6/18~22.6/28~29

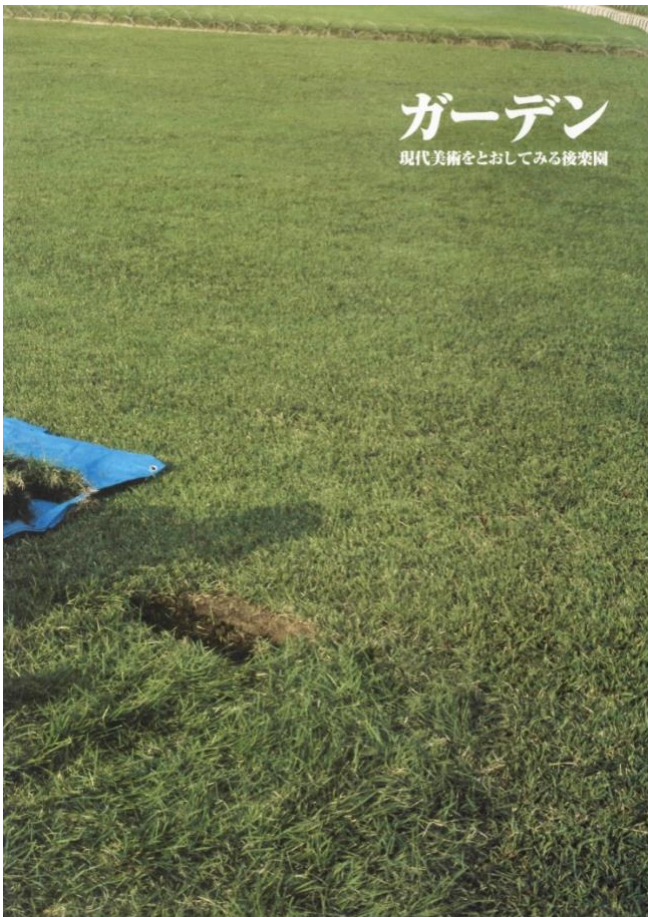
■Upcoming Exhibitions
・「能勢伊勢雄・植田信隆展」(平面) ・「泉啓司展」(立体) ・「川越理美」(陶)
7/1(火)~7/13(日) 7/16(水)~7/27(日) 8/6(水)~8/17(日)

プリント通信 Punto Exhibition Information
2008年6月6日発行 発行人 藤多郎 編集人 米良尚子
Galeria Punto
〒700-0822 岡山市表町1-4-61 2F
TEL/FAX 086-224-0376
e-mail orange@galeria-punto.com
URL http://www.galeria-punto.com

Nov.2000

Okayama Korakuen
300 year festival
Environmental Art
"Garden"

Invited Artists
(Okayama Japan)



池田 晶一 いけだ しょういち

空の鏡—うつろいゆく空のいろ—
雲の鏡—うつろいゆく雲のいろ—

茂松庵、観音寺手前松林、馬場、流店付近

池田の作品は鏡込みによる陶器。
これまでは、幾何学的な形体のパーツを複数量産し、それが別を作り円を描くなど繰り返して並べられながら周囲の空間と関係を持つインスタレーションを展開してきた。
これらはいずれも、色のパリエーションもない幾何学形体の反復でありながら、「SUNAMOON」などの詩情あふれる作品タイトルとも相まって、極めてスリジュアルな印象を生み出す。
それは淡色の軸線や微妙な曲線を描くボディにより、あたかも他の光源に対する反射光と、自らが発する光が見極めがたく混在するような不思議なニュアンスを醸し出すからであり、言わば彼の作品は様々な光と影・影のパリエーションを提示する場なのである。
このように光に注視する態度を一貫させる池田は、今度の後楽園での作品発表に際し、直園における光の存在に注目した。後楽園の景観の主要部となる沢の池は、太陽光により水面を輝かせて自らの姿を映え、あるいは太陽光を何度も繰り返す鏡となって光を周囲へと提供する。
池田は、この沢の池の機能と鑑内に拡張し、こうした池の機能を知らしめる装置として、青い「空の鏡」、白い「雲の鏡」の2種類の陶板を用意した。
この陶板は、表面に施された樹目状の線条体により、自身の見え方、周囲への光の反射具合を変えるが、そのうえ、刻々と移ろい行く太陽光の微妙な変化を増幅して示すゆえ、実にデリケートに光の変化を見て取ることを可能にする。また鏡裡を利用したトリックアートの壁止められることを恐れて音響中にはあえて注意をうながさなかったが、これらの陶板は見る角度によって、その色相がまったく異なって見えるという副次的な効果もある。
これらの作品は、主として流店付近の池水の中と松林下に設置された。井や、水面のせりめきに包まれながら周囲に太陽光を受け、一方は、光を吸収する如くに覆われた地表の上で繰り返し差し込む柔らかな太陽光を受け、とても対照的な表情を見せた。
こうした光のコンディションの差異への感受性は、なにより茂松庵における展示において鋭くされた。茂松庵では、青目が差し込む深窓内には白が、蒼むした前庭には青が響かれたが、場を共有することになった藤本由紀夫の作品の香ともコラボレートして、人間が持つ感覚の家に微妙な差異を感受する能力を巧みに引き出すこととなった。

Add a translation

Ikeda's works are pottery by casting.

So far, we have mass-produced several parts of geometric shapes, lines and circles, and repeatedly developed equipment related to the surrounding space.

These all repeat the geometric shape without changing color, but when combined with the title of a poetic work such as "SUN & MOON", it gives a very mental impression.

His work changes to create a mysterious nuance that distinguishes the light emitted from other light sources, the light emitted from the glaze of light emitted by himself, and the body that draws a delicate curve.

It is a place that expresses changes in light and shadow.

Focusing on these lights, Ikeda noticed that there was a pond in the garden when he presented his work in Korakuen.

Sawaike, which occupies most of the Korakuen landscape, illuminates the water with sunlight like a mirror that reflects sunlight, changes the appearance, and gives sunlight to the surroundings.

Mr. Ikeda extended the function of this pond to the garden, and prepared two types of ceramic plates, blue "sky mirror" and white "cloud mirror", as a device to exhibit the function of the pond.

Although this ceramic plate changes the appearance of itself and the degree of reflection of light to the surroundings by the comb-like stripes formed on the surface, it also exhibits subtle amplification and changes in sunlight that change with time.

Therefore, you can see subtle changes in light.

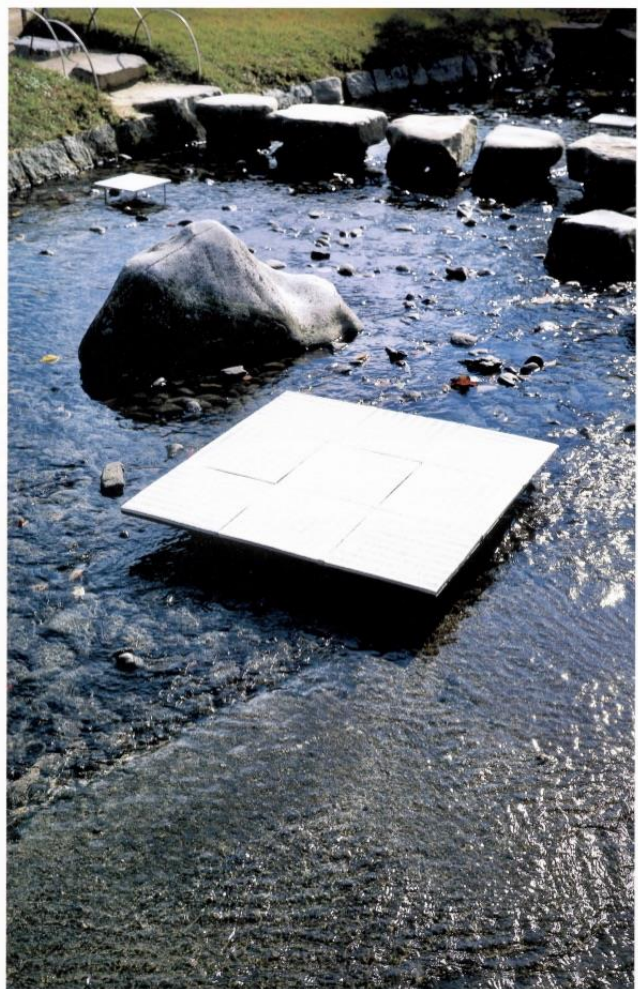
In addition, the viewer was afraid to be regarded as a fantastic trick art, and did not explain the period of the exhibition, but the secondary effect is that these porcelain plates look different depending on the viewing angle. There is also.

These works were mainly installed in kyokusui and pine forest near ruten.

One part receives full sunlight covered with water on the surface of the water, and the other part receives soft sunlight occasionally entering the ground covered with light. This is a very contrastive expression.

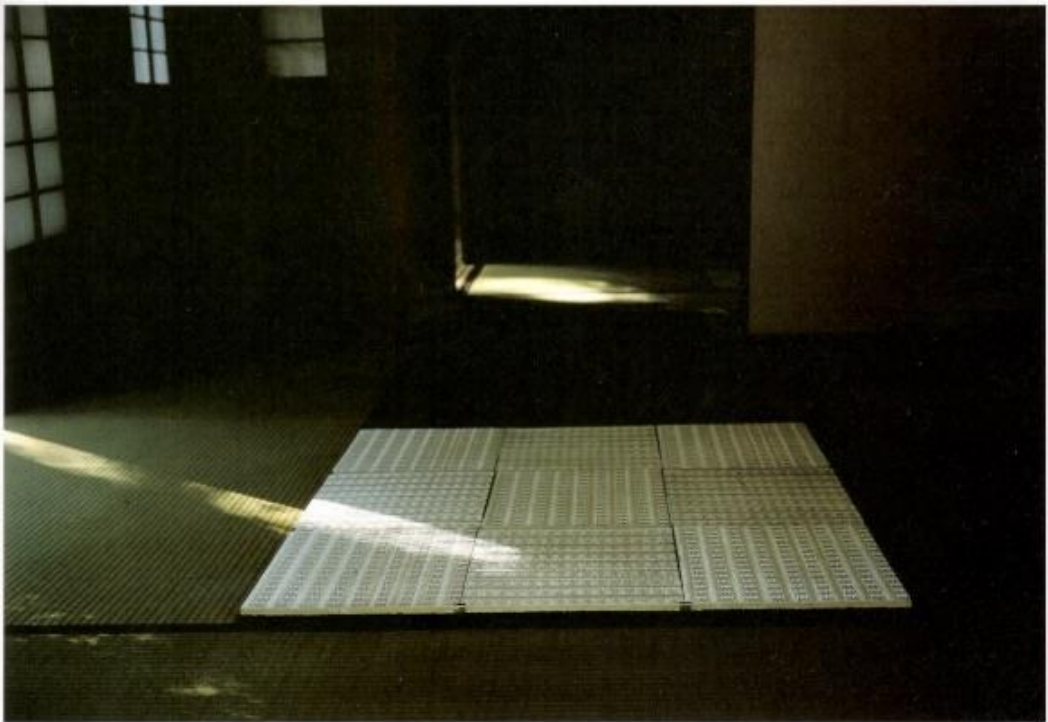
The sensitivity to these differences in light conditions was demonstrated, inter alia, at the mosyo-an (tea house) display.

In mosyo-an, white was in the dimly lit tea room and blue was in the shabby front yard, but the sound of the work of Fujimoto Yukio who shared the place and the sense of humanity and humanity Collaboration was able to skillfully bring out the ability to feel subtle differences.

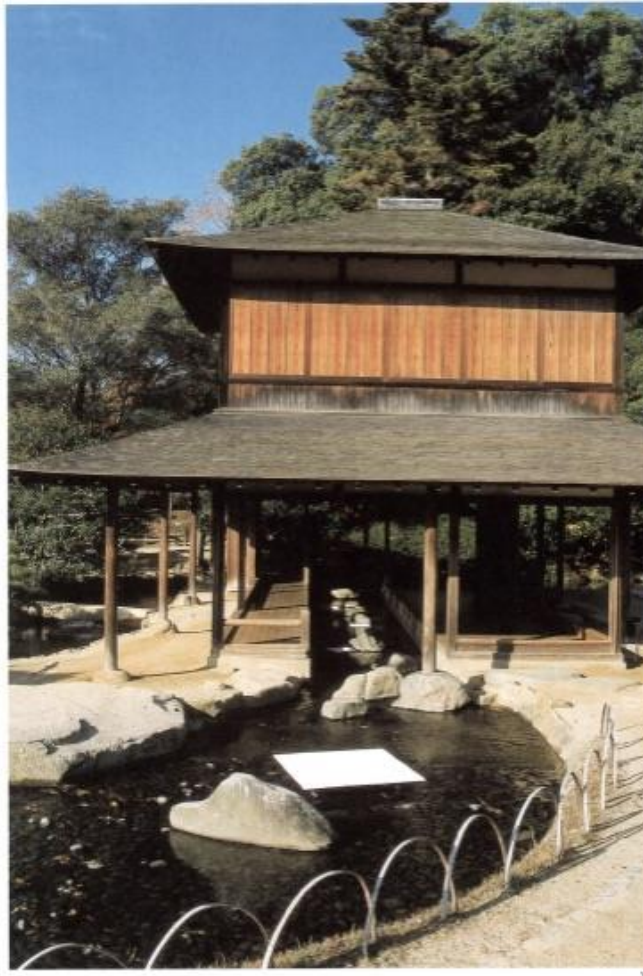




0



0



ガーデン



おかやま後楽園300年祭

現代美術をとおしてみる後楽園

えっ！後楽園で現代美術展 300年祭秋のビックイベント

おかやま後楽園300年祭の一環として、後楽園を舞台に現代美術展が実施される。展覧会は全国的に活躍する十名と一組の作家を招待し園内に大規模な作品を設置する招待展と、外園の河川敷を活用し一般の方が参加できるアンデパンダン展の二部構成。後楽園始まって以来の試みであり、また今後の岡山の文化振興の起爆剤として大きな期待を寄せられている。

10名と1組の招待作家たち

招待されるアーティストはいずれも全国的に高い評価を受ける作家ばかり。景観、歴史、現代社会での意味合いなど、後楽園ならではの特性を配慮した作品を展示する。年齢や作品スタイルなどは多様で、幅広い来園者に対して、この展覧会を魅力あるものにしたいと言う主催者の願いを反映している。

外園河川敷ではアンデパンダン展

一方、後楽園放水路側の河川敷では、無審査無賞のアンデパンダン形式により、一般の方が参加する展覧会を実施。一般の方が3m×3mほどの区画を事前の申込みにより借り受け、思い思いの工夫を凝らした作品を展示。中にも園内の招待作家に負けじと大作を出品する地元の美術学生や、生け花の教室でまとめて出品をするグループも見受けられた。



池田 晶一

Shoichi Ikeda

鑄込みの達人・森羅の詩人

鑄込みの陶器

池田さんの作品は鑄込みによる陶器です。「鑄」と言うと、どろどろに溶けた金属を型に流し込む鑄物のイメージが強いでしょうが、陶器の場合はいささか異なります。まず石膏で作った型に水で溶いた液体状の土を流し込みます。やがて石膏へ接した部分の土が少しずつ水分を吸収され固まりますが、それがある程度の厚みをもったところで、中にある液体状のままの土を流して捨てます。こうして石膏型の内形のとおり土が成形され、それを焼いて作品とするのです。池田さんは、このやり方で幾何学的な形のパーツを複数量産します。そして設置場所に応じて、同じ形のパーツ達を繰り返し並べながら、それが列を作り円を描きながら周囲の空間と調和するような展示を得意としています。

森羅の詩人

制作や作品構成の手法からすれば、池田さんは陶表現の先端を模索する理知的で実験的な存在とも言えます。しかし一方で、作品はいずれも「SUN & MOON」などの詩情あふれる題名が付されるように、彼は森羅万象に目を向け、そしてスピリチュアルなものを尊ぶ詩人でもあるのです。

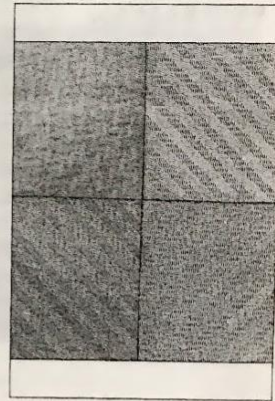
安藤忠雄設計による成羽町美術館での大規模な個展では、色のバリエーションもない幾何学形体の反復による作品が、光の陰影の微妙なニュアンスをたたえる建築と、ゆるやかに呼吸を合わせるように息づいている印象を生み出しているのに驚きました。

おそらく、そうした作品の「うごめき」は「光」を基点に現れているのでしょう。後楽園でも展示される花びらのような作品では、明確なエッジによって隔てられた相互の面が、光の受け方により自ずと明暗のコントラストを示します。しかし、その光と陰・影は、淡いクリーム色の釉薬や微妙な曲線を描くボディによって不思議なニュアンスを醸し出し、あえてそれを例えれば、他の光源より照らし出された反射光と、自らが放つかのような光が見極めがたく混在する、そんな印象を与えます。言わば彼の作品は、実に様々な光と陰・影のバリエーションを提示する場であるのでしょう。

鏡・池・光

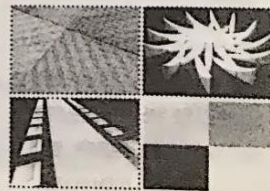
庭園において、池は光を捉え、はね返す鏡となります。後楽園において沢の池が果たす重要な役割は、周囲の景観を映し出すと共に、太陽からの光により自らの姿を変え、そしてその光を周囲へと提供することです。

今回の後楽園のために用意された池田さんの新作は、この沢の池の機能を園内に拡散させるための装置です。これまで以上に作品と光との関係はシンプルかつ繊細なものとならざるをえません。そのために彼が制作したのは、表面の処理に意を払い、そしてその効果を生かすために他の要素をぎりぎりまで削ぎ落とした陶板です。いかがでしょうか。



作家略歴

いけだ しょういち	豊洲半田市在住
1966 昭和41年	京都市生まれ
1990 平成2年	第3回日本現代陶芸展マーケット展 (岐阜県) 土岐市長賞
1991 平成3年	第2回 陶芸ビエンナーレ'91 (岡山県立美術館他) グランプリ受賞
1992 平成4年	石川県クラフトデザイン協会20周年記念クラフトコンペティション石川 審査員賞/鯉江良二賞受賞
1994 平成6年	京都市立芸術大学展'94 (京都市)
1995 平成7年	アートビジョンVol.3 池田晶一 SUN&MOON (成羽町美術館/岡山県)
2000 平成12年	INAX未来館「やきもの新感覚シリーズ」第1回招待作家 (常滑INAXタイル博物館)

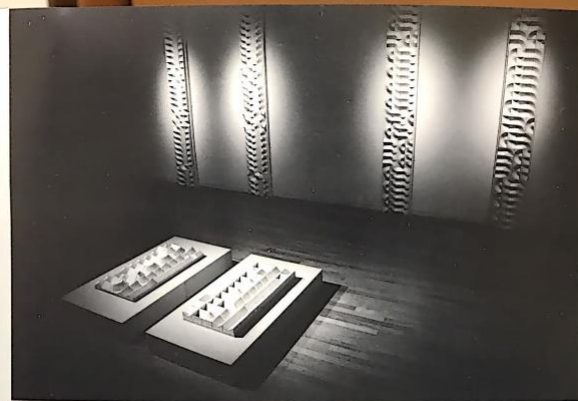
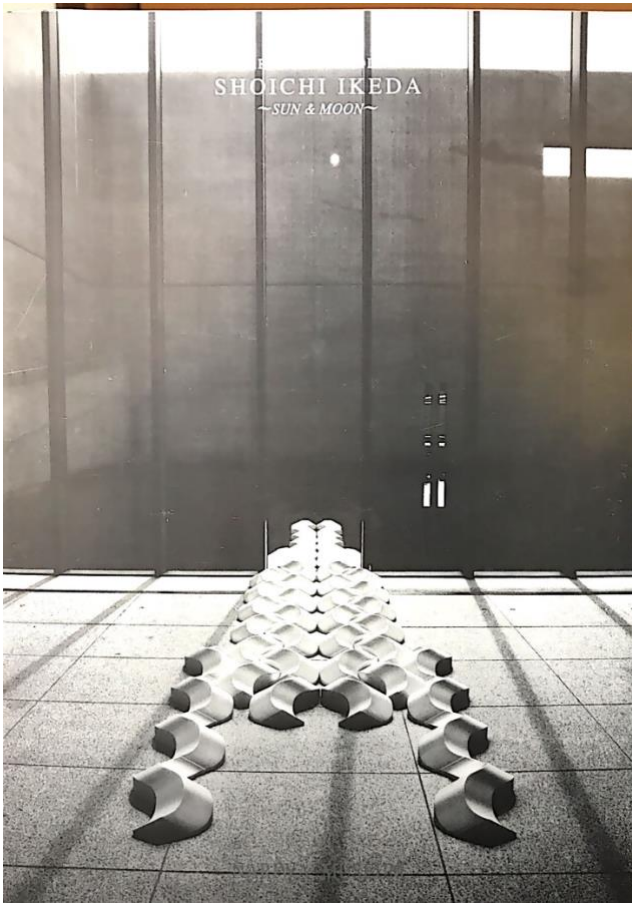


Jul.1998

Nariwa cyo Museum of Art(Okayama, Japan)

by gallery planning

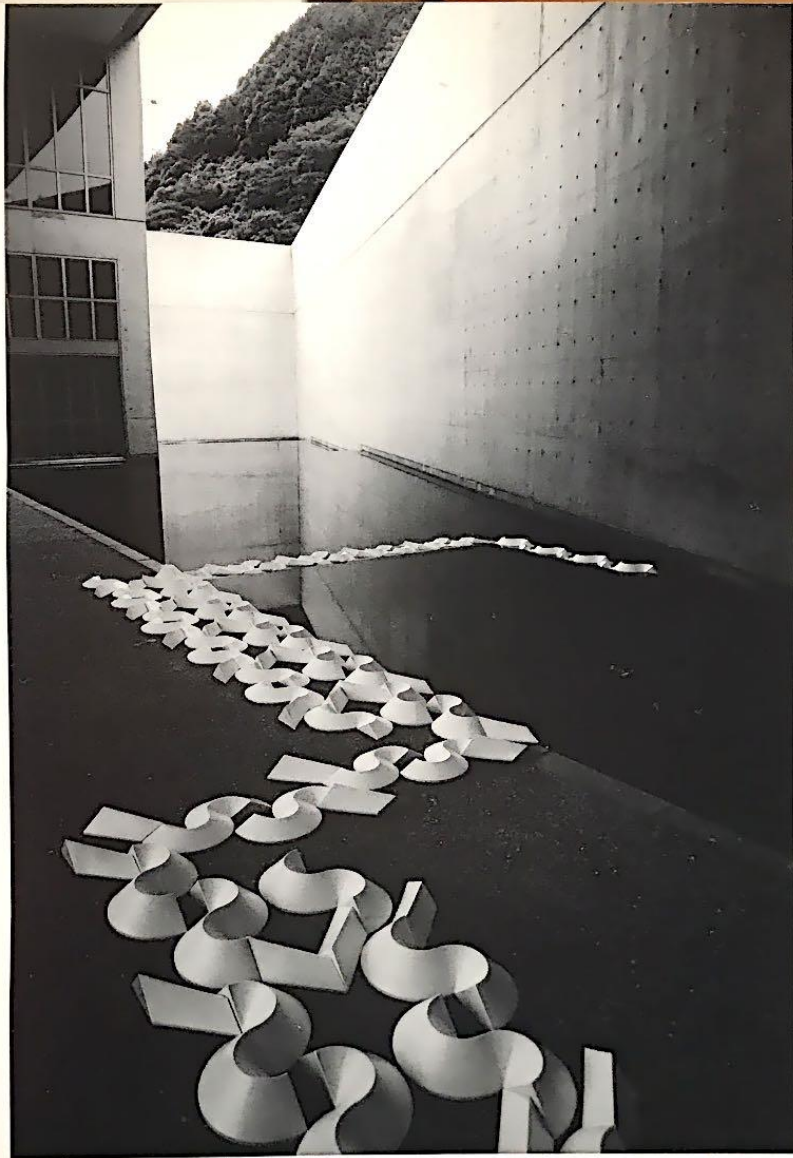
“Art Vision VOL.3 Shoichi IKEDA ~SUN & MOON~”



陰と陽の折りの場所
1998 CERAMIC



上昇もしくは下降のはてに...
1998 CERAMIC



ただよいの中に見えるもの
1998 CERAMIC

シリーズ「アート・ビジョン」は、光・水・コンクリートの絡み合う安藤忠雄設計の成羽町美術館の空間の中で新進のアーティストによる同時代の最先端のアートの状況を紹介する試みとして、スタートした。第3回目に紹介する池田晶一はセラミックを素材としてこれまで、『INSIDE-OUTSIDE』『NEGATIVE-POSITIVE』など相反するもののイメージを幾何的形狀の陶片の組合せによって表現してきた。柱状のモニュメント、壁面のレリーフ、床面(大地)のオブジェへと興味は空間のディテールから次第に拡大し、本展では建築空間全体を舞台としたインスタレーションを展開している。

作品は作り手の極めて個人的な心の動き、人生観から出発している。1996年、夏カンボジアへの旅が池田にとっては大きな転機となった。「1ドルを求めて群がる子供たちに過去の作品を見せたらどう思うか……」自分の生き方、そして軽快なリズム感を重視したこれまでの制作にも疑問が生じる。日本人として、自分の生き様として何を作るのかをその時強く意識したという。自らの精神性を実現するための場として手掛けた『SUN & MOON〜光を自ら放つ太陽と光を受けて輝く月〜』ではその関係を人と人の関わり方の一つと捉えることができよう。享受する者が存在するからこそ与える者も存在する。この役割は時として入れ替わりながらお互いを意識し、高めあう関係は継続していくのである。

本展は異なる5つの場で構成されている。安藤建築はもともと他の素材の入り込む余地の無い完璧な構成で存在している。そこへ大量の陶片群でもって挑もうという池田は根気強い対話の末、うまく空間を味方につけてしまったようである。ほぼ即興で並べ組あげられていったユニットは、その場の特性にしなやかに呼応していった。高さ約9メートルの吹き抜けのハワイエからガラス壁を貫くように池へと続く「境界の向こう側とこちら側」では越えたいけれど越えられない、境界(ガラス)を前にうねるセラミックが人のジレンマを思わせる。あいまいで時には矛盾する心を鎮静させる場として出現した「陰と陽の祈りの場」は見慣れない、それでいてもともとそこにあったような不思議な空間である。詩的表現のタイトルは池田の自らへの問い掛けであり、観者への真っすぐな伝える姿勢のあらわれと感ずる。



12の星床
 ～12の方向が示すそれぞれの形～
 1998 GLASS



PROFILE

1966.6 京都に生まれる。 美術工芸学部
 1990.3 金沢美術工芸大学 美術工芸学部
 産業デザイン学科 工芸デザイン専攻(陶磁)卒業
 1992.3 金沢美術工芸大学 大学院 美術工芸研究科
 産業デザイン専攻 工芸デザインコース(陶磁)修了
 1993.6～ 岡山県立大学 デザイン学部(セラミック)助手

■ 個展
 1990.2 ラブロ片町ギャラリー(金沢市)
 1991.10 ギャラリーマロニエ(京都市)
 1991.12 ワコール銀座アートスペース(東京都)
 1993.11 ギャラリーマロニエ(京都市)
 1994.11 ギャラリーマロニエ(京都市)
 1997.8～10 シンフォニーホール吹き抜け3Fウィンドーディスプレイ(岡山市)
 1997.9 なびす画廊(東京・銀座)
 1997.12 ROSE GARDEN EXHIBITION RIRAN'S GATE(神戸市)・ギャラリー企画展
 1998.1 するおが403(岡山市)・ギャラリー企画展
 1998.7 成羽町美術館(岡山県) アートビジョンVol.3 池田晶一 SUN&MOON

■ グループ展
 1991.8 「土・メッセージ」IN 美濃
 1991.11 セラミックフォーラム・京都(ワコール銀座アートスペース・東京都、ギャラリーマロニエ・京都市)
 1992.7 近代日本の工芸—II(東京国立近代美術館 工芸館)
 1992.8 '92—輪轉し展(ギャラリーマロニエ・京都市、名鉄丸越クラフトギャラリー・金沢市)
 1993.1 2人展【池田晶一・井上博一】(繪部亭・愛知県) 〃 〃
 1993.4 金沢美大OB陶芸13人展(伊丹市クラフトセンター・伊丹市)
 1993.6 金沢美大OB陶芸13人展(画廊 彩博・尾崎市)
 1994.6 京都野外陶芸展'94 〃 〃
 1995.10 「土・メッセージ」IN 美濃
 1996.3 "Media C" Exhibition -Clay & Narcissus-(土 Art Space, 土陶館・韓国/ソウル)・企画・出品
 1996.10 池田 晶一 石製着身展(ギャラリーマロニエ・京都市)
 1997.3 島田清徳・池田晶一展(まつもと・ド・レイン・デピントホール・岡山県)
 1997.11 Ceramic Art Now(岡山県立大学、岡山大学、岡山県)企画・出品

■ 受賞等…
 1988.9 第2回 日本現代陶形展'88(岐阜県) 金ケト展 入選
 1990.3 金沢美術工芸大学 卒業制作作品 賞い上げに選定
 1990.10 第3回 日本現代陶形展'90(岐阜県) マケト展 土岐市長賞
 1991.6 第2回 陶芸ビエンナーレ'91(愛知県) クラジノ
 1991.8 第2回 記念 美三賞陶芸展(愛知県常滑市) 入選
 1997.9 朝日陶芸展 台 入選
 1992.3 金沢美術工芸大学 大学院 修了制作作品、賞い上げに選定
 1992.4 石川県クラフトデザイン 協会20周年記念、クラフトコンペティション石川 審査員賞(特選良二賞)
 1992.10 第4回 日本現代陶形展'92(岐阜県) マケト展 特別賞
 1992.10 第3回 陶形陶器展美濃'92 入賞
 1993.3 第1回 陶芸ビエンナーレ'93(愛知県) 入選
 1993.9 デザインフォーラム '93 入選
 1995.10 第4回 国際陶器展東京'95 入賞
 1996.11 第3回「セラミック・フォーラム」中四国(研究発表会)エニエ賞

アトリエ2V01.3
 池田晶一 SUN & MOON
 1996年7月23日(土)～8月10日(木)

企画・実行委員会 池田 晶一
 協賛 池田 晶一
 印刷/デザイン 印刷株式会社
 本件、成羽町美術館
 〒766-0111 岡山県瀬戸郡成羽町1-1-5
 TEL:086-22-5744 FAX:086-22-5745

成羽の白とうもろこしちから餅
 1996 CERAMIC